

卒業試験は受けなくてもよいとのことでしたが、やはり形式上受けなさいということになり、それも一日だけで、試験科目も幾何と西洋史の二科目だけでした。

試験のとき学校に行つたのですが、幾何の試験の始まる前、少しわからないところがあつたので数学の先生で東 利作という先生（東先生はご自分で数学の教科書を書いておられるほどの数学の大家で、学校では先生のお書きになつた本を教科書として使っていました）にお尋ねして教えてもらつたのです。それから試験を受けたのでした。ところがどうでしょう、何題あつたか忘れましたが、そのうちの一題はたつた今、東先生に教えてもらったばかりの問題でした。これは先生が前もつてその問題をお出しになつておられたのを私が偶然お尋ねして教えていただいたのか、それとも先生が同情なさつてその問題をお出しになつたのではないかとも思うのです。数学は得意の学科だったので幾何の試験は満点だつたと思つています。

それから西洋史の試験です。西洋史は私が以前、留守番に頼まれて行つていた以前のクラス担任の高巢庄太郎先生（東京大学卒業の先生）でした。答案用紙は学校からいただいたのですが、いただいた三枚の用紙では足らなくなり、高巢先生にもう一枚いただきたいと申し上げると先生が「中根そんなに書くな」といわれたのでした。成績表には西洋史は九十八点と記載してありました。これは先生がたくさん書いても少なく書いても九十八点やることに決めておられたのではないかと思うのです。とにかく「そんな